
FAIRYTAIL ~ 氷の滅竜魔導師 ~ 改訂版

神雷鳳凰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRYTAIL〜氷の滅竜魔導師〜改訂版

【Nコード】

N4669Z

【作者名】

神雷鳳凰

【あらすじ】

ある日トラックに轢かれそうになった女の子を守り代わりに轢かれて死んでしまった主人公、秋川 真琴は、まだ死ぬ運命ではなかった真琴をミスで殺してしまったらしい、そして神に転生のチャンスを与った真琴は、エックス・ブラクシアと名前を変えFAIRYTAILの世界へと足を進めるのであった…

ブローグ？

俺の名前は秋川^{あきがわ まこと} 真琴高校1年生のどこにでもいる男子生徒だ、今は下校中、さて今日は帰ったら何をしようかな？

そう考えていると目の前に交差点が見えてきた、見通しがよく、事故も少ないこの交差点は、車どおりが多く、今は帰宅ラッシュのためかいつもより車や、トラック、バイク、自転車、歩行者の通る数も多い、そして俺が目を別の方向に向けると轢かれそうな女の子が… っ て危ない！？

「間にあえええ！！！！！！」

どういつて飛び込むと女の子を歩道に突き飛ばした、しかし、俺に逃げる余地はなかった…

ドシャッ

その音とともに俺の意識は暗転した

次に目を覚ますと俺は全体が白い部屋にいた
そう、窓も、天井もなく、壁があるかどうかともよくわからない、た

だいたいののは、足元に青い魔法陣、簡単に言くと周りに魔法語？みたいなものがあり、周りには雷がうずめいている
ると俺はある考えに至った

俺は死んだのか

それが一番の考えだった

そして俺は仰向けの体制から立ち上がった
すると奥のほうから白いローブをまとい、後ろから白い羽が生えて
いて、リングが頭についている女性がいた
俺はふとその人に話を聞くために移動した

「あのお、すいません」

「えっ！？まさかあなたが私がミスで殺してしまった人？」

「ハッ！？」

この時俺は驚愕した、俺が死んだのはどうやら神様のミスらしい
どうやらこの人が言うにはあの女の子は元々あそこで死ぬ運命だった
のだが、俺が助けてしまったために時空が歪み、運命が変わり俺
が殺されたそうだ

「それで俺はどうすればいいんですか？」

「はい、実はあなたはまだ死ぬ運命ではなかったので地獄にも、天
国にも送れないので、あなたには転生してもらわないといけないの
です」

「どこにですか？」

俺はこの展開を知ってるぞ、この後大体元の世界というところでできなくて、漫画やアニメ、ゲームの世界はOKという展開がテロップ的に決まってる
俺がそう思っていると

「はい、具体的には漫画やゲームの世界に転生できますよ」

「そうですか…」

実際そういわれても困る、行きたいところがありすぎてすぐには選べない

どうしよう…… そうですね、妖精の尻尾の世界だったらいいかもな、魔法を貰って、原作キャラとかかわってみんなと仲良くなりたいし…よしっ！！決まったぜ

「じゃあ、俺は妖精の尻尾の世界に行きたいです」
フェアリーテイル

「分かりました、それで魔法は何がいいですか？」

「じゃあ、氷の滅竜魔法と、氷の滅神魔法、そしてコピー魔法をください、それと失われた魔法のアーク系統と妖精の法律とテン・コマンドメンツの剣型で」
ロストマジック フェアリー・ロウ

「分かりました、ではあなたの転生後の世界で使う名前は？」

「エックス…ブラック…ギャラクシー…… エックス・ブラックシア…
エックス・ブラックシアでいきます」

「分かりました、ではそこに立つてください」

「はい」

「では私のことを念話で呼ぶときはキュリアと頭の中で念じてください」

「はい」

「では、この世界に宿りし、火・水・風・草・光・闇・氷・雷・鉄のフォースよここに集いこの者に新たな人生を歩ませよ！！」

そう神様が唱えると足元の青い魔法陣が蒼く光り俺は光の中に消えて行った

第1話 氷の竜 エターナル

「ばぶばぶばーぶぶ（どうしてこうなった）」

さて俺ことエックスは、いま森に一人で放置されています
多分理由としては捨てられたのだろう、魔法も1つも覚えていない
し何もすることがない…そう思っている

バサッ バサッ ドスンッ

という音がした、何の音だろう？

『こいつは人間の子供か？それにしても人間とは愚かなものだ、な
ぜ子供を捨てるのか…まあ良い、この子供は我が連れて行こう』

ほう、これが滅竜魔導師の誕生するまでの経緯か？

まあとにかく今後はこの竜の言うとおりに暮らせばいいはずだ

そして時は過ぎ10年後…

『エックスよ』

「ん？どうかしたの父ちゃん」

『我とは今日でお別れた』

そつか、もう７７７年７月７日か

「なんで？」

『我にもやることがある、だからもうお別れた』

「…分かった」

さびしいぜ、いくらなんでも

『その代わりと言ってはなんだが、この氷臨刀を与える』

「ありがとう父さん」

『元気に生きろ、エックス』

「うん！」

そう返事を返すと父さんは飛んで行った
満足そうな顔で…

第2話 天竜の子とエドラス王子、エクシードの誕生

ただいま俺はウェンディとミストガンが初めてであった回想シーン
で出ていた森にいます
それにしても

「ここは暑いな」

そう熱帯地域だ、まあ確かに氷の滅竜魔導師だが、体内に氷の魔力
を持っていてもやっぱり暑いのは変わらない

「それにしてもどこだろう…誰だ…」

「君こそ誰だい？」

「俺はエックス、エックス・ブラクシア」

「僕はジェラルル、君はここでいったい何してるの？」

「氷の竜エターナルを探している、この刀は形見だ」

「そうか、君も竜の子か、この子も竜の子だよ」

「……………」

「無口だな」

「この子は引っ込み思案なようだね」

「そうなのか、よろしくな、えーっと」

「…ウエンディ」

「ん？そうかよろしくなウエンディ」

「…うん」

なるほど、このあたりではもうジェラルとウエンディは一緒に行動してるのか

「ところで、エックスはどこに行くつもりなんだい？」

「俺は妖精の尻尾フェアリーテイルに行くつもりだよ」

「そうか…じゃあおわか」…何か来る…！」

「…何が来るの？」

「俺がやる…《チャキツ》二人は離れて」

「あ、ああ」

「……うん」

その言葉を交えると来たのはラクリマジロ、厄介な相手だがそこま
で厄介ではない…！

「行くぞ…！」

「グオオオオオオオ」

相手の雄たけびと同時に奴は攻撃に転じた

「転がりか…ならば！」

そついうと俺は息を吸って

「氷竜の……咆哮！！」

ズゴオオオオオオオ

というものすごい音を立て俺の魔法はラクリマジロに激突した
すると

「ゴオオオオオオオ…《ドサリッ》」

ラクリマジロは鈍い音を立てて倒れた

「刀を使うまでもなかったな《チャキッ》」

そして俺はそうつぶやくと刀を鞘にしまった

s i d e o u t

s i d e ウ ェ ン デ ィ

最初はコワそうな人だったけど

エックスさんかっこいいなあ

フェアリーテイル
でも妖精の尻尾に行くって言っていたし

まあ旅の中でギルドに連れて行ってくれるって言ってたし、入った
ら、聞いてみよう

s i d e o u t

s i d e エックス

「じゃあ俺はそろそろ行くから」

「ああ元気だな」

「またあえたらいいですね」

「そうだね」

そう話し俺はその場を去った

俺はウエンディとミストガンと別れた後、歩き続け、東の森にたどりついた

「もうすぐで妖精の尻尾につくな」
フェアリーテイル

そうココは東の森の中でも妖精の尻尾に近い側
フェアリーテイル
もうすぐで着く

「さてもう夜になるし、そろそろ木に登って寝るか…」

そうつぶやき、木に登るとエクシードの卵らしきものがあつた

「これはエクシードの卵か？原作のハッピーの卵とは模様が違うし、しかももうすぐ生まれそうだ」

そう、その卵はもうひびが入っていてあと1時間ほどで生まれそうだ
そう思っていると

ピキッ

という音がした

「ん？この音はまさか！」

そう思っていると卵が割れ猫が生まれた

第3話 火の竜の子との決闘

今俺は、妖精の尻尾フェアリーテイルに向けて、この前生まれただばかりの猫の雄レイと一緒に歩いています

「ねえ、エックス」

「ん？どうしたレイ」

「あのね、妖精の尻尾フェアリーテイルってどんなギルドなのかなあって思って」

「さあな、俺も今から楽しみだ」

「ルー！！」

ちなみにレイは俺の相棒の猫で、口癖は《ルー》よく返事で《ルー！！！！》と言ってるからである

まあ見た目はハッピーの灰色版フェアリーテイルと想ってくれればいい
そうこう考えているうちに妖精の尻尾のギルドが見えてきた

「なあレイ」

「なに？」

「もしこの先、俺が迷ったり、死にそうになったりしても、一緒に来てくれるか？」

「ルー！！！！もちろんだよ！！」

「そうか、ありがとう」

そう会話を交えて俺とレイはギルドの扉を開けはいつて行った
すると中では、『見ない顔だな』や『今度こそまともなガキが来た
んじゃないエのか?』とか聞こえる

はつきり言つてこのギルドがどんなところなのか改めて分かってきた
そう思っていると向こう側から赤い髪をした女の子が来た

「貴様は誰だ?」

「俺はエックス、こっちは相棒のレイ」

「ルー!!--!」

「そうか、私はエルザだ、よろしく頼む」

「こちらこそ」

「で、貴様はここに何の用だ?」

「おう、このギルドに入りたくて、歩いてここまで来た」

「そうか、マスター!!このギルドに入りたいそうです」

「そうかそうか、今行くぞい」

そういつて立ち上がったのはマスターだ

「おぬしか?このギルドに入りたいのは?」

「はい、このギルドに入れてください」

「いいぞい、それにしてもおぬし名はなんじゃ？」

「俺はエックス・ブラクシア、こっちは相棒のレイ」

「ルー……！」

「よろしくね……！じゃあさっそくじゃがおぬしの魔法はいつたいな
んじゃ？」

「やっぱりきいちゃう？きいちゃうちゃう？」

「はい、俺の魔法は、氷の滅竜魔法です」

「何じゃと！おぬしナツと同じ滅竜魔導師か！」
ドラゴンスレイヤー

「はいそうだ——」「本当かそりゃあ……！」——「うおお……？」

俺の横にはすごく興奮したのちに火竜と呼ばれるわんぱく少年のナ
ツがいた
サラマンダー

凄く至近距離で騒ぐからびっくりしたじゃないか……！！

「お前！竜に育てられたのか！」

「お、おう」

「どんな竜だったんだよ！教えてくれ……！」

凄い質問攻めだな、オイ……！！

「オウ、俺の父さんは、氷竜エターナル…氷の竜だ」

「お前のとこの竜の消えた日も、777年7月7日か？」

「ああ、そうだ…ん？お前もって事はお前のところも？」

「オウ、イグニールは777年7月7日に消えたんだ」

「そうか……」

俺はその時見た、その話を暗い顔で話しているナツの姿が、些細な希望を待っていたナツの顔が

「まあこの話は終わりだ！俺と勝負しろ！！」

おいおい、このころから戦闘狂か！！

「なんでだ？」

「同じ滅竜魔導師だからだよ！！」
ドラゴンスレイヤー

「はあ、わかったやってやるよ」

「おっしや！！燃えてきたアアア！！」

そうナツが叫ぶと、みんなが盛り上がり、特設ステージに移動させられた

「さて、エックス、ナツ、両者準備はいいか？」

「俺はいいですよ、マスター」

「俺もだ、じっちゃん」

「それでは、初め!!」

その言葉と同時に俺は走り始めた…しかし

「おらぁ！くらえ！！火竜の……鉤爪！」

「…クツ！？ならば！氷竜の波動！！」

ズドオオオオオオオオオオ

俺とナツの魔法がぶつかり爆発した

「火竜の咆哮！！」

「間に合え！！俺の望みは、どんなものも守る障壁のごときフォー
ス！」

そう叫び三角状のものを手に持ちこう叫ぶ

「絶対障壁！！ディフェンスフォース！！」

キイイイン

俺はナツの魔法を立てで打ち消した

すると

「次で決めてやる…火竜の——」

「俺もだ、氷竜の——」

俺とナツは咆哮のエネルギーを次の瞬間放出した

「——咆哮！！！！！！」

ズゴオオオオオオオオオオ

という雑音が立ち砂煙で回りがつつまれる
そして砂煙が晴れると

「ま、まけたあ」

そうナツがいい俺が

「勝ったぞお！！」

と叫ぶすると周りが

『『『『オオオオオオオオオオオオオオ』』』』

と叫ぶ

そして

「勝者、エックス！！！！」

と判定を下した

そこで俺は決闘が終わると思っていた
しかし

「なぜこうなった」

俺はその後すぐにエルザ、ミラ、ラクサスに囲まれ、決闘することになった

第4話 最強候補の3人との戦い

「では、始めえい」

そのマスターの声で決闘は始まった

「行くぞ、テイクオーバー！サタンソウル！！」

「換装！天輪の鎧」

「レイジングボルト！！」

チヨ！待つてつて、クソッ

「氷臨刀よ、我は願う、この刀に氷の魔力をまとうせることを…氷臨剣・第壹奥義…氷臨斬！」

ザシュッ！！

この音とともにラクサスのレイジングボルトを叩き切った

「次だコピー開始！！」

そう俺が言つとラクサスとエルザ、ミラの足元に魔方陣が現れた

「何だこれ」

「よけようにもよけれんぞ」

「まあいいさ、テン・コマンドメンツ変形第三の剣…音速の剣!!」
シルファリオン

ヒュンッ

「どこにいきやがった」

「変形!第七の剣…重力の剣」
グラビティ・コア

そうつぶやくとラクサスの背中に重力に任せ打ちつけた

「ぐあっ!!」

そう断末魔を上げるとラクサスは倒れた

「勝者!エックス!!」

『『『『『『オオオオオオオオオオオオオオオオ』』』』』』

俺は勝った

あのあと俺は3人を回復させてギルドに戻った

「おいレイ」

「何エックス？」

「クエスト行くぞ」

「ルーー!!」

「じゃあいくぜー!!」

そういつて俺とレイは闇ギルドの撲滅に行った

そしてそのクエストに行ってから4年の時が立った

キャラ設定

名前 エックス・ブラクシア

年齢 過去編11歳 原作時 17歳

この物語の主人公、神様のミスで死んでしまった
しかし転生して魔法を手にし、FAIRYTAILに入った
食べ物は冷気や氷の魔法

魔法

氷の滅竜魔法

- ・氷竜の咆哮

氷のレーザーで相手を貫く

- ・氷竜の鉄拳

冷気を纏った拳で殴る

- ・氷竜の波動

腕や足から波紋状の冷気をだし噴射する

- ・氷竜剣

手に冷気でできた剣を出す

滅竜奥義

- ・氷冷風雅乱舞

氷竜剣と氷臨刀を使い敵を乱舞で切りつける

・絶対零度氷神風

氷の滅神魔法の氷神の断罪と氷竜の吹雪をまとい敵に向かって氷臨刀を振る

・換装

・テン・コマンドメンツ

剣の形態はRAVEと同じだが
最後の第十の剣が、エックスの作ってもらった破壊の剣に
なっている

・氷臨刀

エターナルからもらった刀で刃の色が峰の部分が蒼、刃の
ほうが水色の神秘的な刀

魔力を籠め、刃先にまとわせることもできる

・氷の滅神魔法

・氷神の怒り

手に冷気をまとわせ、敵を殴る

・氷神の息吹

敵に向かって冷気のきを浴びせる

・氷神の氷弓

氷で弓を作り、敵に向かって矢を撃つ。当たった矢は貫通
せずに敵の命を蝕む

・コピー魔法

敵や味方の魔法をコピーする、相手の足元に魔方陣を表示する

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4669z/>

FAIRYTAIL ～氷の滅竜魔導師～改訂版

2011年12月17日12時59分発行